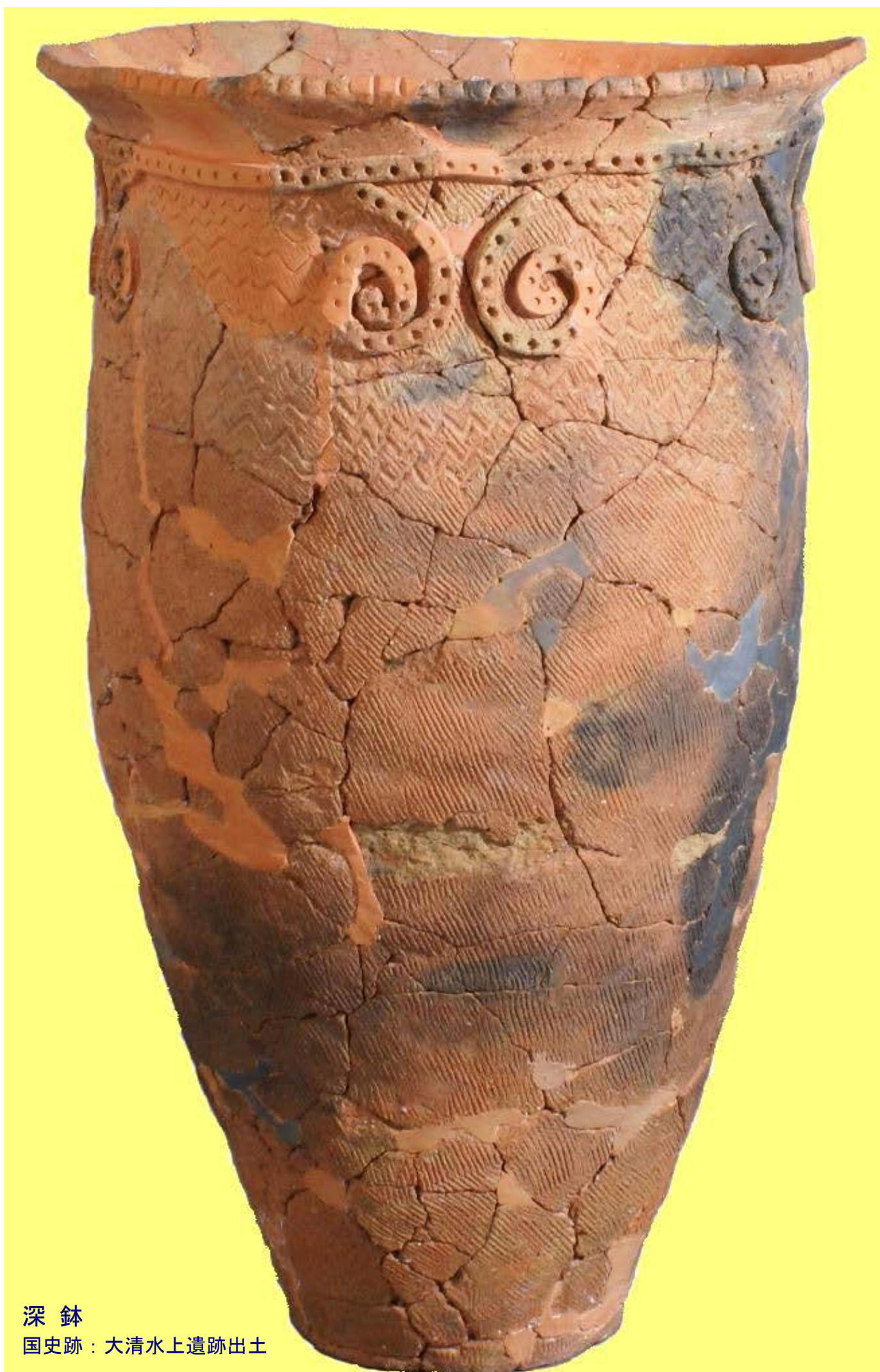


# 発掘された奥州市展

—奥州市の縄文時代と最新の発掘成果—

2013



深鉢  
国史跡：大清水上遺跡出土

奥州市教育委員会

# ごあいさつ

遺跡は歴史を記録する大切な文化財であることから、文化財保護法で大切に保護されています。発掘の成果は、現地説明会や報告会で公開されるほか、調査報告書としてまとめられていますが、これまで出土遺物を観覧できる機会は限られていました。

そこで、今年度は平成 24 年度に行われた埋蔵文化財発掘調査によって新たに判明した奥州市の歴史に加え、国史跡・大清水上遺跡など奥州市の縄文時代を特徴付ける遺跡を紹介します。奥州市牛の博物館、奥州市埋蔵文化財調査センター及びえさし郷土文化館において巡回展示いたしますので、多くの方々にご覧いただければ幸いです。

現在、奥州市には約 1,100 箇所の遺跡が確認されています。この企画展示が郷土の歴史文化に関心をよせるきっかけとなれば幸いです。

平成 25 年 6 月

奥州市教育委員会

教育長 佐藤 孝 守

# -平成 24 年度発掘調査成果-

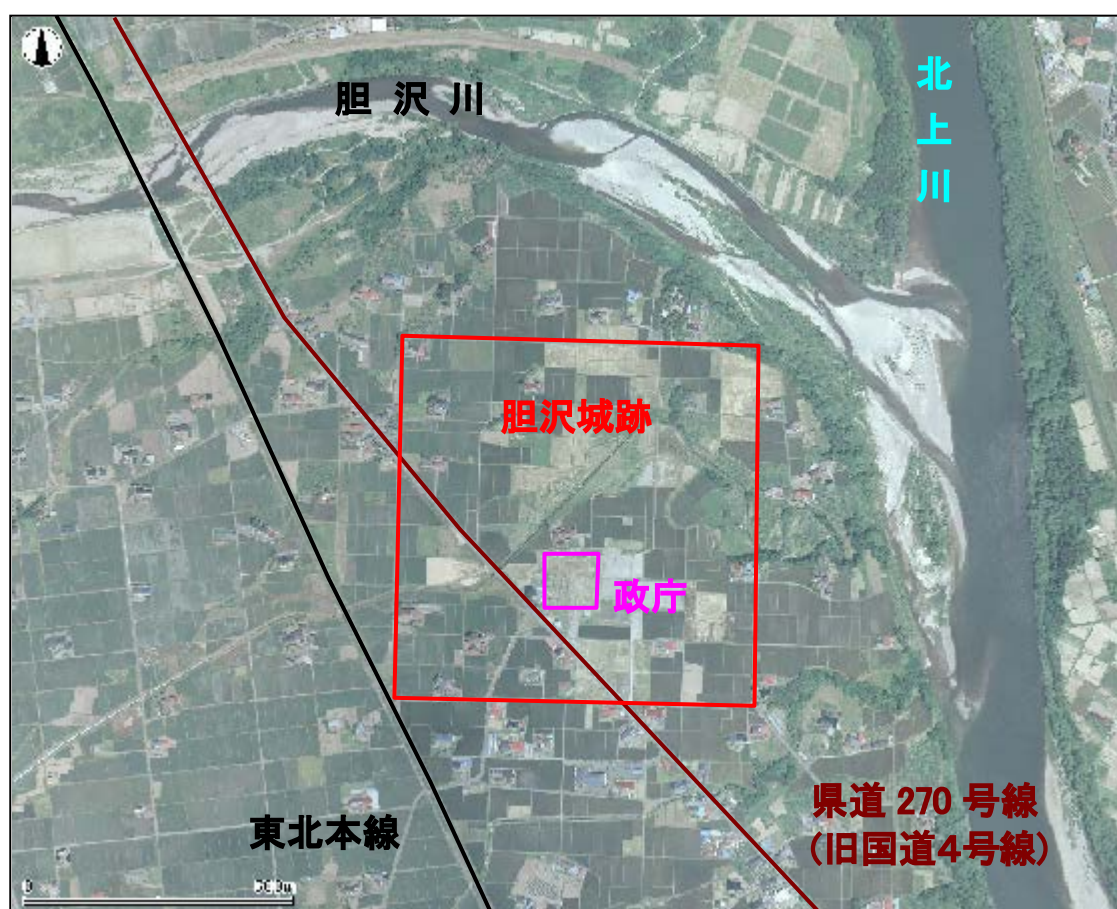
## 胆 沢 城 跡

胆沢城は、延暦 21 (802) 年坂上田村麻呂により造営され、10 世紀後半まで陸奥国のうち岩手の内陸南部を治めた城柵です。

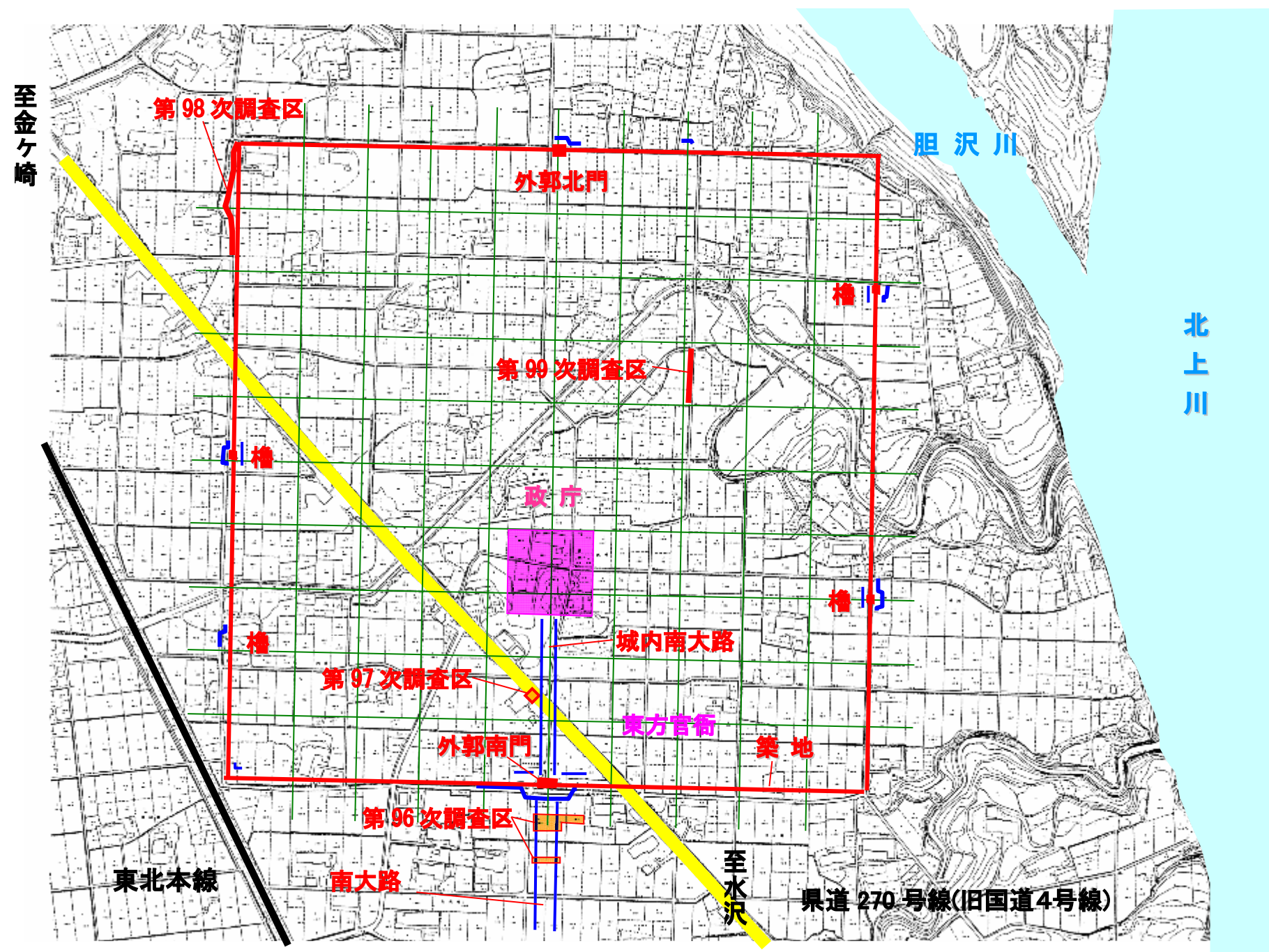
北上川と胆沢川の合流点の西に位置しており、大正 11 (1922) 年 10 月 12 日に国の史跡に指定されました。

これまでの調査の結果から胆沢城は外郭と呼ばれる一辺が 670m ほどの築地やその内外にある溝により四辺が囲まれていることがわかっています。

また、門や櫓などは外郭をおよそ十分割した位置に存在し、このような施設が存在する場所では基本的に外郭外溝が外側に張り出すことがわかっています。さらに、城内の中央やや南よりには一辺 90m ほどに区画された政庁と呼ばれる儀式空間があり、政庁の周辺には官衙と呼ばれる役所の実務を行う建物群があることがわかっています。



胆沢城跡位置図



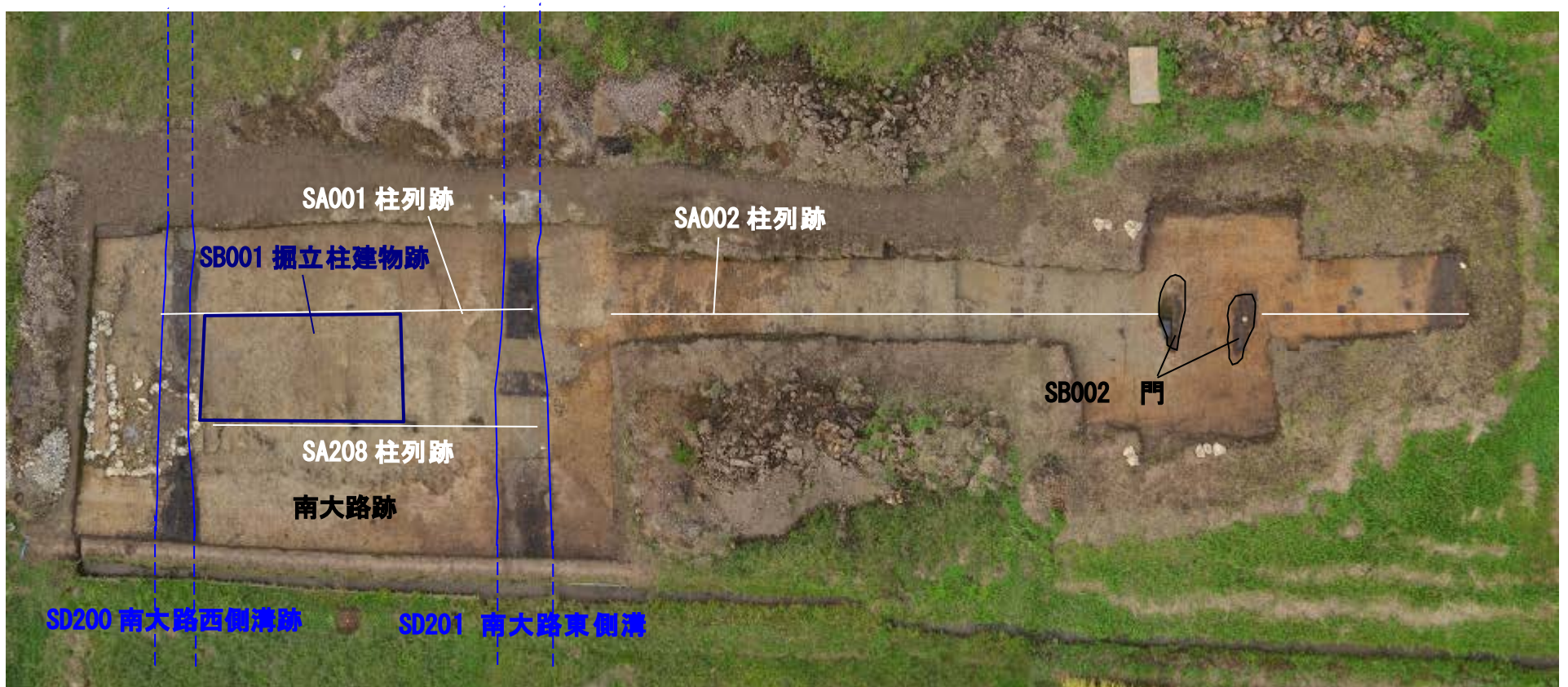
平成24年度胆沢城跡発掘調査区位置図

# 胆沢城跡第 96 次発掘調査

|        |                              |
|--------|------------------------------|
| 調査地番   | 岩手県奥州市水沢区佐倉河字九蔵田 44、45、59、60 |
| 調査面積   | 372.68 m <sup>2</sup>        |
| 調査実施機関 | 奥州市教育委員会                     |
| 調査目的   | 外郭南門地区整備に係る事前調査              |

胆沢城跡第 96 次調査は、昭和 51 年度の第 25 次調査で検出した南大路跡を東西に横切る柱穴列跡の性格確認を目的として、平成 24 年 6 月 4 日から同年 10 月 17 日まで調査を実施しました。

遺構は掘立柱建物跡 1 棟、門跡 1 棟、柱列跡 3 条、南大路および大路の両側溝が見つっています。



第 96 次発掘調査区全景

## SA208 柱穴列跡

昭和 51 年度第 25 次調査でも見つかった柱穴列跡で、南大路を東西に走る柱穴列跡です。第 25 次調査の報告書から、南大路跡の側溝よりも SA208 柱穴列跡が新しいと判断しました。

SA208 柱穴列跡は東西に約 13.5m、7 本の柱で構成される 6 間の柱穴列跡で、3 時期の変遷があります。

## SA001 柱穴列跡

今回の調査で検出した柱穴列跡で、SA208 柱穴列跡から 3.5m ほど北側で検出しました。SA208 柱穴列跡同様、南大路を東西に走る柱穴列跡です。

SA001 柱穴列跡は東西に 13.2m、9 本柱の 8 間で構成され、作り変えの痕跡等は確認できませんでした。遺構の重複から南大路東西両側溝が埋没した後に機能していた柱列跡であると考えられます。

## SB001 掘立柱建物跡

SA208 柱穴列跡、SA001 柱穴列跡と重複して見つかり、SB001 掘立柱建物跡が最も新しいと考えられます。

第 25 次調査では柱穴列跡と解釈されていましたが、今回の調査で SB001 掘立柱建物跡は桁行 3 間 (7.145m)、梁行 2 間 (3.549m) の掘立柱建物跡であることがわかりました。今回の調査で最も新しい遺構です。

## SA002 柱穴列跡

調査区の東、SA001 柱穴列跡の東に検出しました。SA001 柱列跡と柱跡の間隔が異なることと、SA001 柱穴列跡よりわずかに北へずれることから、SA001 柱穴列跡とは別の柱列跡と考えました。

また、SA002 柱穴列跡には門が取りつき、さらに東へ伸びます。門跡を SB002 門跡としました。

SA002 柱穴列跡は調査区内で門を含めて約 25m であり、柱穴跡の一部に重複が認められるものの、基本的に単期の遺構と考えられます。

## SB002 門跡

SA002 柱穴列跡に取り付くと考える門跡です。SA002 柱穴列跡と直行するように南北方向に 2 m 程の柱穴の抜き取り穴跡と、抜き取り穴跡の周辺に柱を据える掘り方が残っていました。

調査から SB002 門跡は 2 期の変遷があることを確認しました。

また、新しい柱穴跡の抜き取り穴の上層付近には十和田 a 火山灰が堆積していました。

十和田 a 火山灰は西暦 915 年に降下したと考えられていますので、SB002 門跡は 915 年以前に機能していた遺構であると考えられます。



SB002 門跡全景（南から）白く写っている部分が火山灰

## 南大路跡と東西両側溝跡

南大路跡と南大路跡の東西に走る側溝跡（西側溝：SD200・東側溝：SD201）を検出しました。

南大路跡の路幅は 10.5～11m、東西両側溝跡の底面中央からの距離が 12.5～13m ほどです。

SD200 溝跡の埋土の上層には火山灰が含まれている可能性があり、今年度分析をおこなう予定です。

火山灰が十和田 a 火山灰であれば、南大路両側溝跡については火山灰降下後の 915 年以降はわずかにくぼんでいる状態であると考えられます。



南大路跡および東西両側溝全景（直上）

## まとめ

第 96 次調査で見つかった遺構には、時期を明確に確認できる遺物はほとんど出土していませんが、遺構内に堆積した火山灰や遺構の重複関係から火山灰降下以前と以後とに分けることができます。SA002 柱穴列跡及び SB002 門跡は火山灰降下以前、SA208 柱穴列跡、SA001 柱穴列跡、SB001 掘立柱建物跡は火山灰降下後の遺構であると考えられます。

今回調査の目的であった SA208 柱穴列跡は南大路の両側溝が埋まった後に作られたもので、この位置には SA001 柱穴列跡や SB001 掘立柱建物跡などが作られます。SA208・001 柱穴列跡は南大路両側溝までの幅に作られることから、南大路のスペースを意識した構造であると考えられます。なぜ区画施設が設けられるのかは今後の課題です。

今回の調査で SA002 柱穴列跡・SB002 門跡が見つかったことで、胆沢城南外郭のさらに南に南大路の東側を南北に区画する遺構が存在する結果となりました。

今後課題を残す結果となりましたが、南大路のあった空間に区画施設が設けられることを確認することができ、また、胆沢城外にも区画施設が設けられることを確認することができました。

# 胆沢城跡第97次・98次・99次発掘調査

|        |                                                                                                     |
|--------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 調査地番   | 岩手県奥州市水沢区佐倉河四月 23-1、53-2（第 97 次調査）<br>岩手県奥州市水沢区佐倉河八ツ口地内（第 98 次調査）<br>岩手県奥州市水沢区佐倉河渋田地内（第 99 次調査）     |
| 調査面積   | 約 5 m <sup>2</sup> （第 97 次調査）<br>110.49 m <sup>2</sup> （第 98 次調査）<br>約 16 m <sup>2</sup> （第 99 次調査） |
| 調査実施機関 | 奥州市教育委員会                                                                                            |
| 調査目的   | 個人住宅の改築工事に伴う確認調査（第97次調査）<br>農業用水路改修に伴う確認調査（第98次・99次調査）                                              |

## 胆沢城跡第97次調査

第97次調査の調査区は政庁南門と外郭南門を結ぶ城内南大路の西側に位置します。

97次調査区の周辺では過去に30・50次調査が行われ、掘立柱建物跡、柱列跡、土坑跡などがみつかっています。

また、城内南大路をはさんで東側には東方官衙域が広がっています。

遺構は柱穴3基、性格不明遺構1基がみつかりました。このうち、SA001柱穴跡は規模の大きな柱穴跡であり、長軸 1.33m、短軸 0.65m以上で直径 24 cmの柱の痕跡を確認しました。

この柱穴跡は調査区が狭いためはっきりとはわかりませんが、第 30 次調査や第 50 次調査で見つかった柱列跡の一部である可能性があります。



第 97 次発掘調査区全景（北から）

## 胆沢城跡第 98 次調査

胆沢城跡第 98 次調査区は胆沢城跡外郭北西コーナー付近から南へ 123m ほどの長さの水路であり、調査の結果、胆沢城跡西外郭外大溝と思われる溝跡のプランを検出しました。

また櫓状建物跡が取り付くと予想された位置の外大溝が西側に張り出すことを確認しました。

さらに、北西コーナー付近では外溝の内側に土坑状のプランを検出しました。この遺構は北西隅櫓状建物跡を構成する柱穴跡の可能性があります。



第 98 次発掘調査区外郭外溝屈曲部分（南から）

## 胆沢城跡第 99 次調査

胆沢城跡第 99 次調査区は胆沢城内を流れる九蔵川南岸で、調査区の北側は九蔵川の解析による河岸段丘が形成されています。今回の調査では縄文時代と推測される土坑跡と時期不明の小柱穴跡が 3 基確認できただけでした。

# 杉の堂遺跡第 35 次発掘調査

調査地番 岩手県奥州市水沢区佐倉河字杉ノ堂 81-1  
調査面積 約 360 m<sup>2</sup>  
調査実施機関 奥州市教育委員会  
調査目的 個人住宅建築に係る事前調査

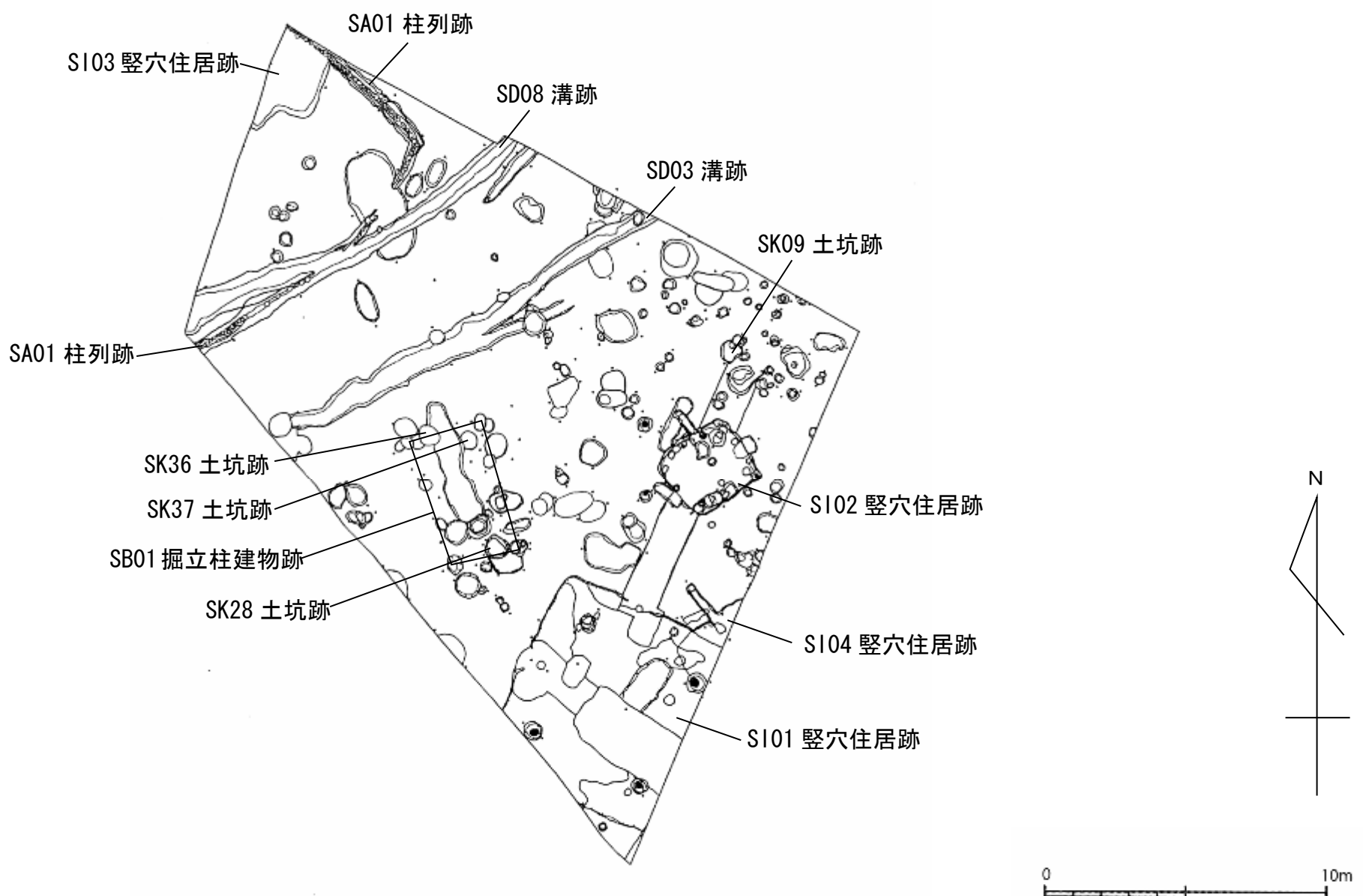
杉の堂遺跡は胆沢扇状地の下位段丘である水沢段丘に位置する縄文後期・晩期、弥生、奈良、平安時代の遺跡です。

昭和 34 年の第 1 次調査から昨年度の調査まで 35 回の調査が行われており、今回の第 35 次調査区付近では縄文時代後期の遺構や遺物が多く見つかっています。

今回の調査では竪穴住居跡 4 棟、掘立柱建物跡 1 棟、柱列跡 1 条、溝跡 6 条、土坑跡 54 基、柱穴跡 92 基が見つかり、縄文時代中期末から後期（約 4000 年～3000 年前）の土器や石器が多く出土（15 cm×35 cm×50 cmのコンテナ約 35 箱）しています。



杉の堂遺跡第 35 次発掘調査区位置



杉の堂遺跡第 35 次調査区遺構配置図

## 竪穴住居跡

調査区の東で3棟、西で1棟の合計4棟検出しました。このうち **SI01** 竪穴住居跡と **SI04** 竪穴住居跡は重複があり、**SI01** 竪穴住居跡のほうが新しいと考えられます。また **SI02** 竪穴住居跡と **SI04** 竪穴住居跡からは奈良時代の土師器が出土しているため、奈良時代の住居跡であると考えられます。

**SI01** 竪穴住居跡については後世の削平によって非常に残りが悪かったため、はっきりとはいえませんが、周辺から奈良時代の土師器が出土しているため、奈良時代の住居跡である可能性があります。



SI01 竪穴住居跡（北東から）

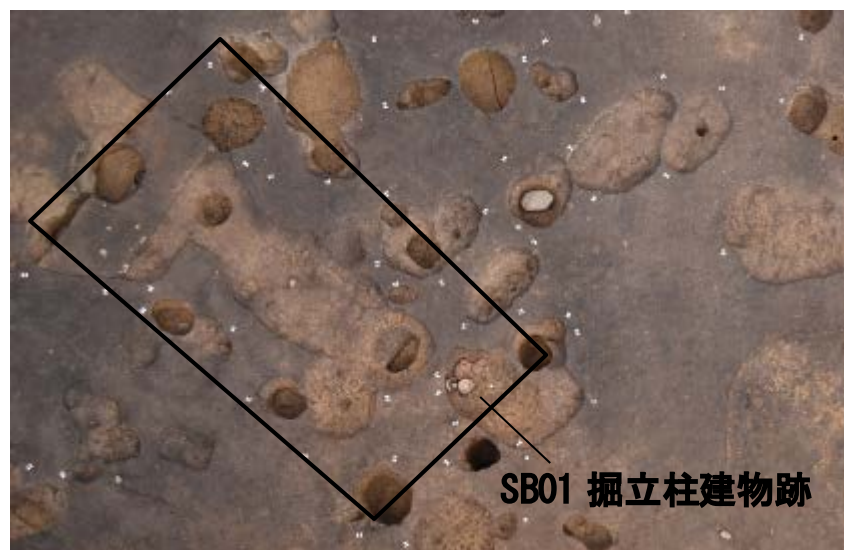


SI04 竪穴住居跡（南東から）

## 掘立柱建物跡

調査区中央やや南よりで **SB01** 掘立柱建物跡を検出しました。平面形は東西 1 間(2.3m)×南北 3 間(北から 1.5m、1.5m、1.6m)の南北棟で、柱は抜き取られた痕跡が認められます。

土層の観察から縄文時代中期末の **SK36** 土坑跡より古いと考えられ、今回の調査区では縄文時代前期以前の土器は出土していないため、縄文時代中期の遺構であると考えられます。



SB01 掘立柱建物跡（直上）



SB01 掘立柱建物跡柱穴断面（南東から）

## 柱列跡

調査区西側でほぼ直角に屈曲する **SA01** 柱列跡です。調査区内で北西方向に 6.4m、南西方向に 11.1mの長さで、調査区外にも延びると考えられます。

また、底面において柱穴跡が密に並んで検出されていることから材木柱塀の跡であると考えられ、断面の観察から使用されなくなった後に柱は抜き取られたと考えられます。

時期についてははっきりしませんが **SI03** 竪穴住居跡よりも新しく、**SD08** 溝跡より古いと考えられるので、奈良時代から平安時代の遺構であると考えられます。



SA01 柱列跡（南東から）

## 溝跡

調査区全体で溝跡は6条検出しました。このうちSD03溝跡とSD08溝跡は比較的しっかりとした素堀りの溝で、SD03溝跡は調査区北側に延び、SD08溝跡は調査区の南北に延びます。

時期は遺物が少量であるためはっきりしませんが、ロクロ土師器の破片が出土しているため平安時代の溝跡である可能性があります。

またSA01柱列跡と重複し、SA01柱列跡より新しいと考えられます。



SD03・SD08 溝跡（直上）

## 土坑跡

調査区全体で土坑跡は54基検出しましたが、遺物がまとまって出土したのはSK09、SK28、SK36土坑跡の3基であり、縄文時代の土坑であると考えられます。

特にSK36土坑跡からは縄文時代中期末の深鉢がほぼ一個体分出土しており、縄文時代中期末の土坑跡であると考えられます。

また、断面の形状が理科の実験に使用するフラスコに似ているフラスコ状土坑を5基検出しました。このフラスコ状土坑は縄文時代の貯蔵穴であると考えられます。



SK28 土坑跡遺物出土状況（南西から）



SK36 土坑跡遺物出土状況（北西から）



SK37 土坑跡（フラスコ状土坑）断面（南東から）

## まとめ

今回の調査では奈良時代の住居跡や縄文時代の土坑跡、奈良時代から平安時代の可能性のある材木柱塀跡が見つかり、縄文時代は食料等を貯蔵する区域、奈良時代は集落として利用されていたことがわかりました。

また、材木柱塀跡については区画施設の東コーナーを検出したものと考えられますが、この区画施設がどのような施設を区画するものなのかということや、どの程度の規模なのかは今回の調査ではわかりませんでした。

しかしながら今回の調査区の西側に材木柱塀を区画施設とする何らかの施設があるということがわかったことは重要であり、今後周辺の調査が行われれば、この区画施設の性格が明らかになる可能性があります。

# 白鳥館遺跡第 11 次発掘調査成果概要

調査地番 奥州市前沢区字白鳥館・鶉ノ木田地内  
調査面積 977 平方メートル  
調査期間 平成 24 年 5 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日  
調査機関 奥州市教育委員会 世界遺産登録推進室



## 調査成果概要

第 11 次発掘調査は、鍛冶炉などの手工業生産遺構や掘立柱建物跡が確認された 8～10 次調査区の東の延長（北調査区）を調査したほか、川湊遺構を確認するため、微高地南端部の低地との境界付近（南調査区）の発掘調査を行いました。

その結果、12～13 世紀と推定される掘立柱建物跡 4 棟、井戸跡 4 基、井戸状遺構 1 基、道路状遺構 1 条、溝跡 4 条、粘土を採掘した穴 2 基などの遺構とともに、中国産陶磁器（青磁）、国産陶磁器（常滑、渥美）、かわらけ（ロクロ・手づくね）、銭（熙寧元寶・判読不能の銭）、釘などの鉄製品や鉄滓、玉状の銅製品、砥石などの遺物がコンテナ（60×30×10 cm）で約半箱分出土しました。

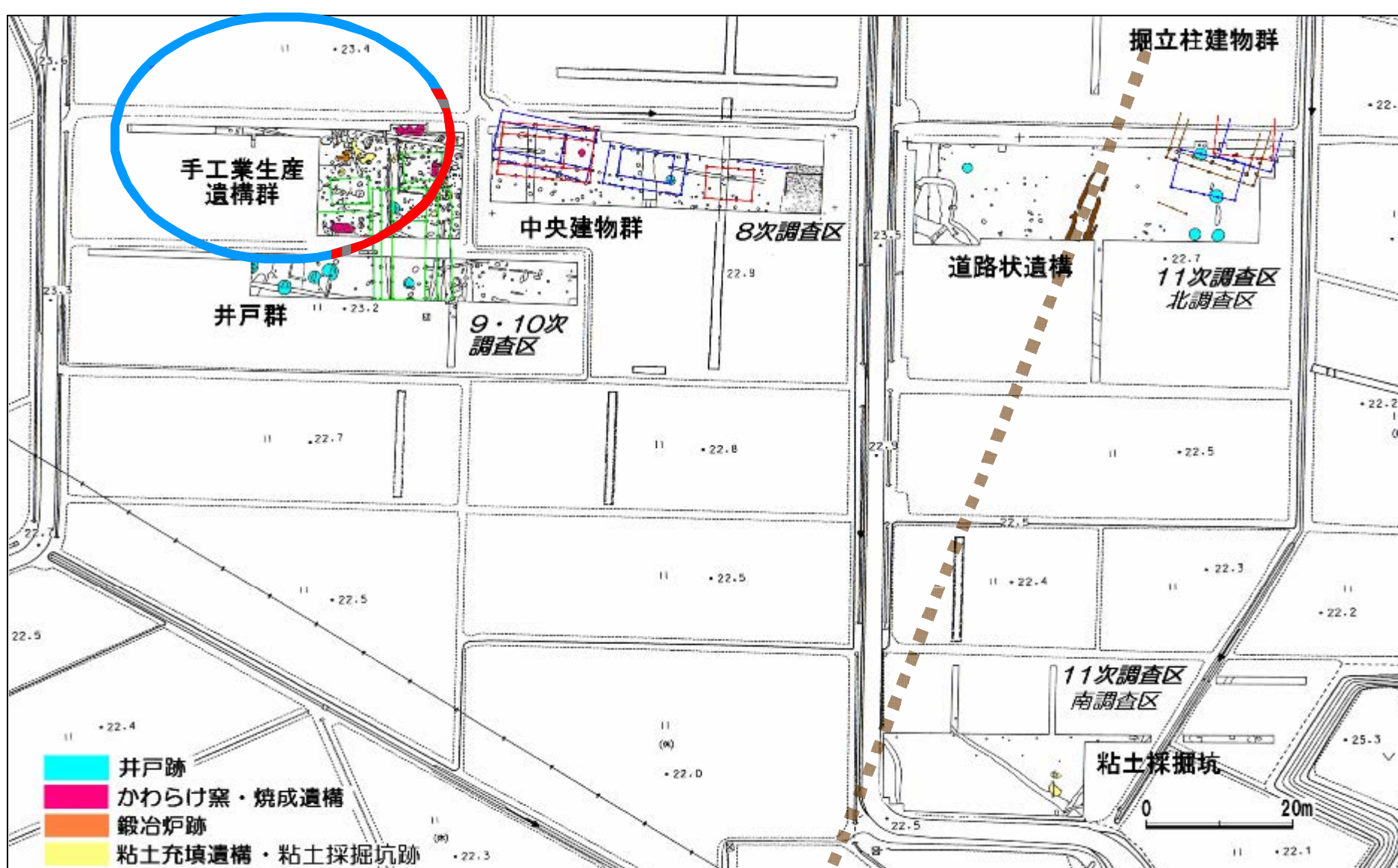
北調査区では、中央部で道路状遺構、東部では掘立柱建物跡群が見つかっています。道路状遺構は、建物跡群の西側に隣接して南北に延びています。建物跡とは重ならず、方位が一致することから、建物跡群に伴う道路跡と推定されます。また、道路状遺構の西側には遺構がなく、広場的な空間であったことが窺えます。建物跡群は、北調査区の北東隅で 4 棟確認されました。いずれも同じ場所で重なり合っており、建て替えられた建物である可能性もあります。柱間寸法や建物の方位が 8～10 次調査で見つかっている建物跡と似ていることから、これらと近い時期に建てられた建物と考えられます。また、今回の調査で見つかった建物跡群の北側に隣接する田では、過去の調査で掘立柱建物跡の一部と考えられる 12 世紀ごろの柱穴群が見つかって

いることから、建物跡群はこの付近まで広がる可能性があります。

南調査区では、昨年度の調査で見つかったかわらけ窯に関係すると推定される粘土採掘穴が2基確認され、かわらけ生産の様相を知るうえで貴重な発見となりました。出土遺物は、9～10次調査に比べると非常に出土量が少ない点が特徴ですが、これは今回の調査区の遺構の性格が工房群とは異なるためと考えられます。

今回の調査により、白鳥館遺跡低地部では12～13世紀初めごろにかけて、微高地中央部に掘立柱建物群、西部に工房群、道を挟んで北東部にも建物群があることが明らかとなり、遺跡の場の構成がより明確になりました。

次年度以降の調査では、微高地上の遺構の様相を明らかにするとともに、低地南東部の発掘調査を重点的に行い、川湊遺構の確認を進める予定です。



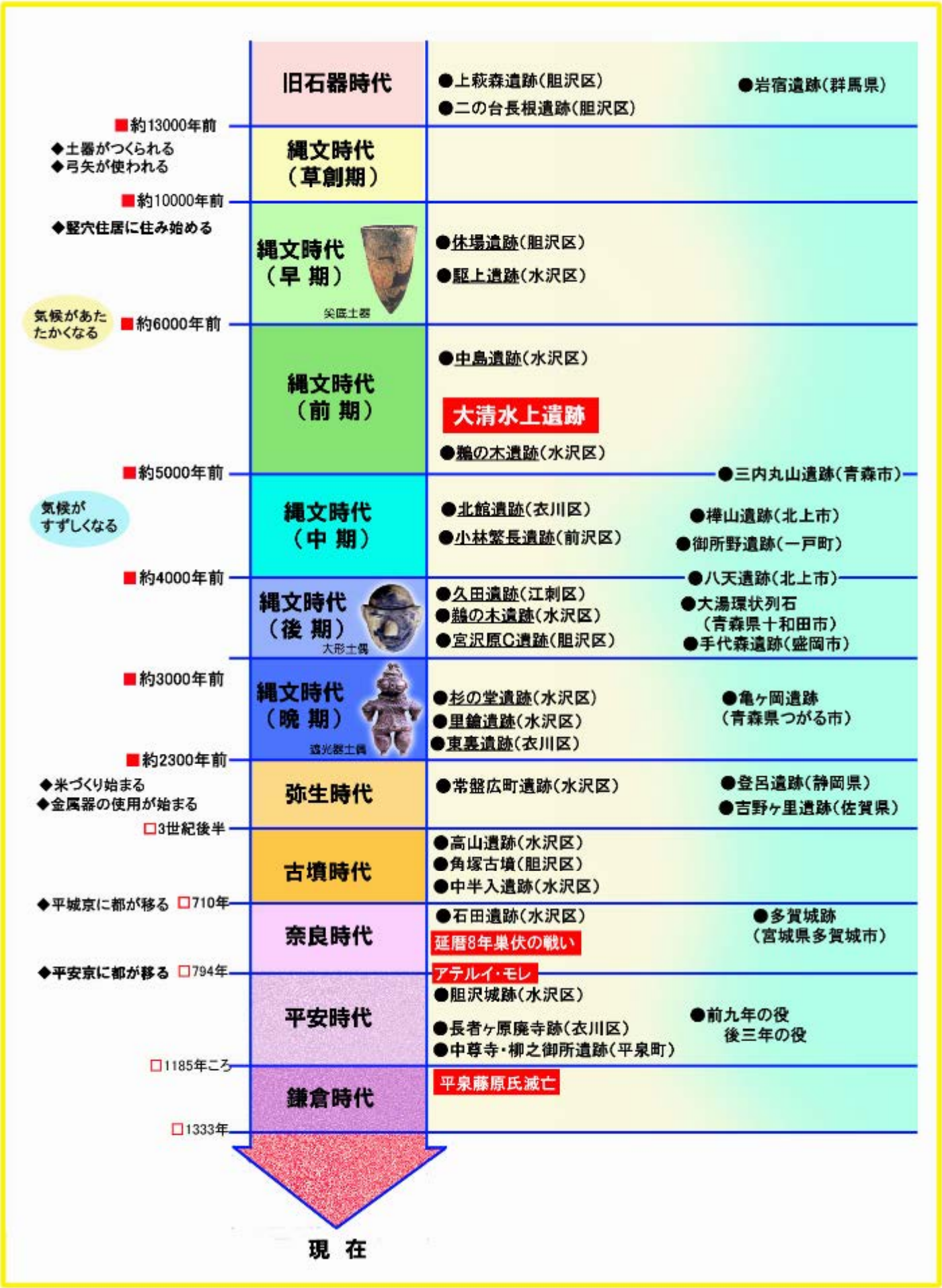
# －奥州市の縄文時代－

## 縄文時代

今から約 1 万 3000 年前から 2,300 年前までの約 1 万年間を縄文時代と呼び、縄文時代に使用されていた縄目の文様を持つ土器のことを縄文土器といいます。

縄文時代はこの縄文土器の型式からさらに草創期（1 万 3000 年前～1 万年前）、早期（1 万年前～6,000 年前）、前期（6,000 年前～5,000 年前）、中期（5,000 年前～4,000 年前）、後期（4,000 年前～3,000 年前）、晩期（3,000 年前～2,300 年前）の 6 期に区分されます。

奥州市では草創期の土器は出土していませんが、それ以外の早期から晩期の遺跡は多く存在しています。



## 縄文時代早期（10,000～6,000 年前）

早期は温暖化が進んで海面が上昇し、海岸線が現在よりも内陸に入り込んできました。この現象を縄文海進といいます。

温暖化が進むにつれて定住が進み住居を持つようになりますが、完全な定住はしておらず、季節的な遊動生活を送っていたと考えられます。

市内では、土器の底が尖った尖底土器や貝殻で模様をつけた貝殻文土器、沈線で模様をつけた沈線文土器が出土しています。



## 縄文時代前期（6,000～5,000 年前）

早期末に温暖化はピークを迎え、現在より平均気温が2度程度高かったと考えられています。温暖化が進んだことにより木の実などの食料の獲得が容易になり、人口が増加します。

人々は集団で定住するムラをつくり大規模な集落が形成されるようになり、市内では大規模な拠点集落である大清水上遺跡（胆沢区）が見つかっています。

市内の遺跡で出土する土器は東北地方の南部に分布する大木式土器と呼ばれる土器であり、東北地方の南部と同じ文化圏であったと考えられ、大清水上遺跡の「イチジク形土製品」や「燕尾形石製品」など現在の宮城県や秋田県の辺りとの交流をうかがわせる遺物が出土しています。

しかし、中島遺跡（水沢区）からは現在の岩手県北部や青森県辺りの地域の文化の影響を受けた土器が出土しており、他の文化圏との交流も行っていたことがわかります。

また、この時期に特徴的な遺物として、大清水上遺跡や大田遺跡（江刺区）で出土している玦状耳飾があります。



東北北部地域の影響を受けた土器  
中島遺跡出土

# 国指定史跡大清水上遺跡

奥州市胆沢区に所在する大清水上遺跡は、日本最大級の扇状地である胆沢扇状地の最奥頂部、標高 280m の中位段丘上に立地しています。

遺跡のある場所が、国土交通省の胆沢ダム建設事業によりコア材採取地になったことから、平成 12 年度より（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を行なったところ、中央広場を有する環状集落であることがわかりました。

集落は縄文時代前期後葉の大木 5 式期に限られ、遺構がまったく存在しない直径約 20m の中央広場を取り囲むように、長さ 10m 以上もある大型竪穴住居の多くが、その長軸を中央広場の中心部へ向けて、直径約 110m の円環状に配置され、さらにこの外側には、小型竪穴住居や主に貯蔵穴と想定される土坑が配置されます。大型竪穴住居は同じ場所で頻繁に建て替えが行われ、一棟の建物には 2 ～ 7 基の複数の地床炉（火を焚いた跡）が認められました。

以上のことから、大清水上遺跡は、「胆沢川流域における縄文時代前期の拠点集落としての意義はもちろん、北上川中流域の縄文文化研究、ひいては東日本の縄文集落構造研究を進める上で貴重な学術的価値を持つ遺跡」として、平成 20 年 7 月 28 日、国の史跡に指定されました。



大清水上遺跡全景（直上）

写真提供：（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター



大清水上遺跡出土土器



土 玉



左からイチジク形土製品、燕尾形石製品（2点）

## 縄文時代中期（5,000～4,000 年前）

中期は前期に引き続き大規模な拠点集落が形成されますが、中期の後半あたりから気候が冷涼になり始め、集落が小型化し各地に分散し始めます。これに伴って遺跡の数も増加します。

市内の遺跡で出土する土器は前期と同様に大木式土器と呼ばれる土器ですが、前期とは少し土器の雰囲気が変わります。粘土紐で区画を施してその中に縄文の文様を付けたり、土器の形が立体的になります。



## 縄文時代後期（4,000～3,000 年前）

前期の終りや中期にみられた大規模な拠点集落は減少し、低地にも集落が形成されて集落の分散化が進みます。

土器は深鉢に加えて鉢、台付鉢、壺、注口土器など種類が豊富になり、派手な装飾や模様をつけた精製土器と縄文だけの文様の粗製土器にわかれます。

また、祭りや祈りの道具も豊富になります。特に大文字遺跡（江刺区）では土偶が非常に多く出土しています。



人面が施された土器  
胆沢区宮沢原遺跡出土

## 縄文時代晩期（3, 000～2, 300 年前）

晩期は集落の数は少なくなり、規模も小さくなります。一方で墓地は多く見られ、副葬品の数や種類が増えます。

土器は華麗な文様を持つ亀ヶ岡式土器が数多く作られ、土器の種類は深鉢、鉢、台付鉢、浅鉢、台付浅鉢、皿、壺、注口土器、香炉形土器など後期よりもさらに種類が豊富になります。

祭りや祈りの道具の種類も豊富になり、市内の遺跡からも遮光器土偶や写実的な土偶、動物形土製品、石棒・石剣、ミニチュア土器が多く出土し、耳飾や勾玉などの装身具も多く出土しています。



左 2 点：台付鉢、香炉形土器（前沢区川岸場遺跡出土）

右 2 点：注口土器、壺（衣川区東裏遺跡出土）

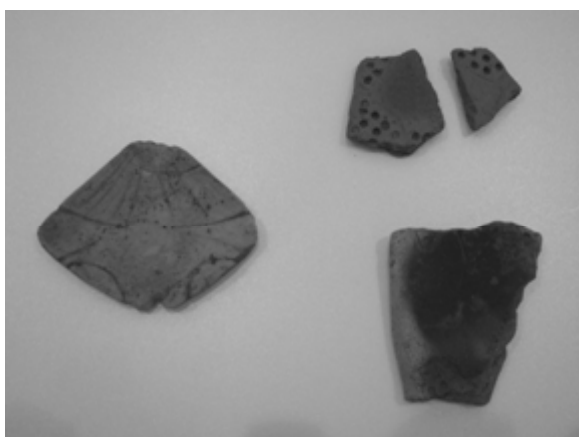
## 祭りと祈り

縄文時代の人々は日々の生活や食料の入手量が自然条件に大きく左右されていました。

そのため、縄文人は自然に対しての畏れや敬う心を持っていたと考えられ、それは日常生活用具以外の土偶や石棒、勾玉などの道具から伺うことができます。

このうち土偶は女性をかたどったものであり、市内では早期から晩期までさまざまな形の土偶が出土しています。前期から中期までの土偶は板状土偶といわれる板状の土偶で模式的で平面的なものが多いですが、後期になると大文字遺跡（江刺区）で出土しているような立体的になります。さらに、晩期になると遮光器土偶など装飾が施された土偶や写実的な土偶が登場します。

また、耳飾や腕輪、勾玉なども単なる装身具ではなく、身につけることで悪霊などから身を守るといったような意味があったのではないかと考えられます。



左：前期の岩偶と板状土偶 中：後期の立体的な土偶 右：晩期の遮光器土偶

## 墓 制

縄文時代の人々も現代の我々と同様に死者を弔う心を持っており、家族や親しい人が亡くなると集落の墓地に埋葬していました。

縄文時代の一般的な墓は地面を掘り下げ、遺体をそのまま埋葬したものです。（土坑墓）埋葬方法は足を真っ直ぐに伸ばした伸展葬や、足を折り曲げた屈葬などがあり、道具や装身具などが副葬品として入れられている場合もあります。

一方、幼児や胎児は土器に遺体をいれて埋葬した事例が多く、杉の堂遺跡（水沢区）では大人の墓と考えられる土坑墓と子供の墓と考えられる土器棺墓の両方が見つかっています。



土器棺墓調査状況①（展示品）



土器棺墓調査状況②

## 食料の獲得と交易

縄文時代の人々は弓矢や落とし穴で動物を獲る狩猟や銚や網で魚を獲る漁労、木の実や野草を採る採集によって日々の糧を得ており、そのための道具や食料を調理する土器もすべて自らの手で作成していました。

市内の遺跡では大文字遺跡（江刺区）や東裏遺跡（衣川区）からイノシシやシカの骨が出土しており、重要な食料源であったことがわかります。さらに東裏遺跡からは、シカの角で作られた漁労に使用したと考えられる銚が出土しており、食料資源としてだけではなく、道具の材料としても重要であったことがわかります。ほかにも大文字遺跡からはコイ科、ホオジロザメ、ニシン科、ブリ属、スズキの骨が出土しています。コイ科の魚はウグイやフナ、ニゴイなどの可能性が考えられ、淡水魚なので、集落の近辺で捕獲したと考えられますが、その他の魚は海水魚なので沿岸部から交易によりもたらされたものであると考えられます。

さらに、石鏃や銚などを柄に固定する際に使用された天然のアスファルトも秋田県から新潟県の日本海側からしか産出されないため、交易によりもたらされたと考えられます。

また、市内の遺跡からは出土していませんが、岩手県内の遺跡の出土例から内陸部に住んでいた縄文人はイワナ、ヤマメ、サケ、ウナギ、ギバチなどの魚も捕獲して食料にしていたと考えられます。

木の実については、大文字遺跡、杉の堂遺跡（水沢区）、東裏遺跡からクルミの殻が出土しています。

また、花粉分析から大清水上遺跡（胆沢区）の周辺では当時クリの木が多く生えていたことがわかっており、食料として利用していたと考えられます。



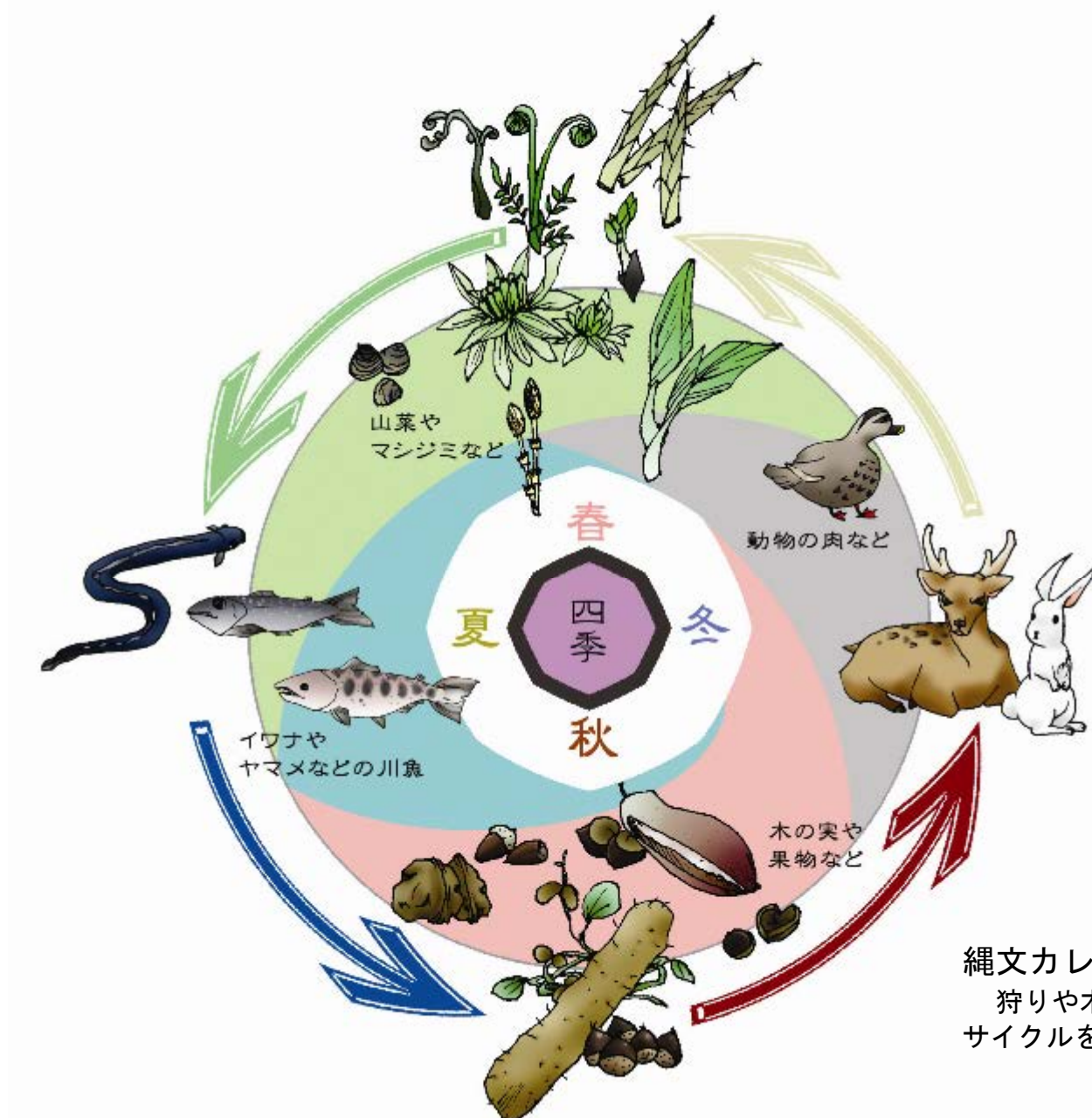
大文字遺跡出土の動物遺存体(動物の骨)

上段：ニホンジカ 中段：イノシシ

下段：魚類（左からコイ類、ホオジロザメ、ニシン科、ブリ属、スズキ）



東裏遺跡出土の動物の骨でできた銛(骨角器)



縄文カレンダー

狩りや木の実の採集など縄文人の1年間のサイクルを図にしたものです。

## 道具の名称と用途

|              |                                                                   |
|--------------|-------------------------------------------------------------------|
| 石鏃（せきぞく）     | 狩猟用具として矢の先端につけた石の <sup>やじり</sup> 鏃。                               |
| 石槍（いしやり）     | 石でつくった槍の穂先で動物を獲るために使用した。                                          |
| 石匙（いしさじ）     | 石でつくったナイフで、江戸時代には天狗が食事をするために使用したスプーンであると考えられていたため石匙という名称がつけられている。 |
| 石錐（せきすい）     | 穴を開けるための石でつくった <sup>きり</sup> 錐。                                   |
| 石鍬（いしくわ）     | 土を掘るための石でつくった鍬。                                                   |
| 磨製石斧（ませいせきふ） | 木を切るために使用した石を磨いてつくった斧。                                            |
| 石錘（せきすい）     | 石でつくった <sup>おもり</sup> 錘で魚を捕るための網に使用したと考えられる。                      |
| 石皿（いしざら）     | 木の実などをすりつぶす際に台として使用した石器。                                          |
| 磨石（すりいし）     | 木の実などをすりつぶす際に手に握って使用した石器。                                         |



## 祈りの道具

|                  |                                        |
|------------------|----------------------------------------|
| 土偶（どぐう）          | 土でつくった人形で女性像が多く、生殖・収穫を祈る祭祀に使用したと考えられる。 |
| 動物形土製品           | 動物の形を模した土製品。展示品はクマと考えられる。              |
| スタンプ形土製品         | 練り食品の仕上げに使用したという説と装飾品の一種という説がある。       |
| 鐸形土製品（たくがたどせいひん） | 縄文時代後期に東北地方北部で使われた釣鐘形の土製品。             |
| 石棒・石剣（せきぼう・せっけん） | 男性を象徴した石器で生殖・収穫を祈る祭祀に使用したと考えられる。       |
| 玦状耳飾（けつじょうみみかざり） | 耳飾の一種。主に石製で縄文時代前期から中期の初めに使用された。        |
| 耳飾（みみかざり）        | 装身具として耳たぶに穴を開けて装着したと考えられる。             |
| 勾玉（まがたま）         | 石や土でつくった装身具。                           |



玦状耳飾の使用例



耳飾の使用例

# 発掘された奥州市 展 2013

－奥州市の縄文時代と最新の発掘成果－

主催：奥州市教育委員会（主管：歴史遺産課）

[会場・会期]

|                |                  |
|----------------|------------------|
| 奥州市牛の博物館       | 平成25年6月7日～6月16日  |
| 奥州市埋蔵文化財調査センター | 平成25年6月21日～7月7日  |
| えさし郷土文化館       | 平成25年7月12日～7月21日 |